



18世紀フランス小説における女性読者のイメージー 美德を巡る戦略

宇野木, めぐみ

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2016-02-17

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3299号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003299>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文審査等の結果の要旨

論文提出者氏名	宇野木めぐみ
論文題目	18世紀フランス小説における女性読者のイメージ - 美德を巡る戦略

1 審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	松田浩則
副査	教授	坂本千代
副査	教授	阿尾安春
副査	教授	白鳥義彦
副査	准教授	中畑寛之

2 論文審査の結果の要旨・・・別紙1のとおり

3 試験の結果の要旨・・・別紙2のとおり

4 学位授与の可否

上記の論文審査及び試験の結果、並びに学力の確認の結果、論文提出者は博士(文学)の学位を得る資格があることを認める。

神戸大学大学院人文学研究科

論文審査の結果の要旨

氏名	宇野木めぐみ
論文題目	18世紀フランス小説における女性読者のイメージ - 美德を巡る戦略

要 旨

本論文は、「女性の世紀」とも形容されるフランス18世紀の小説において、書物、とりわけ小説を読む女性がどのようなイメージのもとで描かれていたのかを明らかにしつつ、描かれたイメージと作家の執筆上の戦略との関わりを明らかにしようとするものである。ここで分析の対象となったのは、書物とともに描かれた女性の肖像画、また家族や集いの光景の中での書物の位置づけ、そして18世紀をとおり論じられつづけた女子教育論における小説の読書の取り扱い、さらには18世紀の女性たちの読書状況などである。このような分析から、18世紀の絵画や小説といった想像的空間に潜む、女性を揶揄し、美德を強制する思考の枠組みの存在とその機能の様態が明らかにされた。次に、出版統制下にある作家たちが、「小説は女性の美德の敵である」といった言説にどのように対処したのかが問題となった。つまり、作家は自らの作品の真正な作家ではなく、単なる紹介者、作家の友人、代理の語り手、翻訳者にすぎないなどと自分の姿を偽りつつ、「危険にして有害な作品」を女性読者に届けようとする。そして女性読者もまた、その作家による「虚偽」を「虚偽」と知りつつ、自分の身を危険にさらさずにはおかない読書に没頭するという構図が浮き上がってくる。このように、「女性」という記号が介在したことによって、エクリチュールと権力との相克が、たとえば16世紀フランスにおけるフランソワ・ラブレーの教会権力(ソルボンヌ)との戦いとまた別な様相を見せていることが明らかにされた。最後に『マリヤヌの生涯』『成り上がり百姓』『マノン・レスコー』『危険な関係』等の小説テキスト内における小説を読む女性の分析を通して、それぞれの作家たちが当時の倫理観や時代が期待している女性像に、かつ迎合し、かつ離反しつつ危険な舵取りを余儀なくされていた実態を明確に描き出した。

第一章「18世紀フランス絵画における書物」では、ボドウワン、アヴェド、グルーズ、ユベール・ロペール、シャルダン、ブーシェ、フラゴナール、ヴィジェールブランほか多数の画家の作品の分析を通して、絵画に描かれた書物や読書行為は、主体の性差によってそのイメージに明白な差異が見られることを明らかにした。絵画が男性と書物を描くとき、書物は男性の知的位階、あるいは思索的側面を表象するものであるが、それに対し、女性と書物が描かれるとき、とりわけそれが風俗画であるときには、書物は女性の官能を刺激するものであることが示唆されている場合が多いことが詳述された。また、男女混合での読書では、母子を描いたものを別とすれば、書物を朗読する役割は専ら男性のものとなっていることが確認された。これらの分析は明快で、論文全体の構造を俯瞰させるには効果的ではあるが、先行研究にたいする自らの立場がややもすると曖昧な箇所があったり、分析がじゅうぶんな深みにまでいっていないような箇所も見られた。今後の研究によって、この部分の充実をはかるとともに、論文全体の構成を認識しつつ分析対象の作品を見直すなどの対策を取るとさらにいい仕上がりになるように思われる。

主査記載
氏名・印

松田浩則

第二章「女子教育論と小説」では、第一章で分析された絵画に描かれた女性と書物に関するイメージが生まれる基盤を、18世紀の読書状況と女子教育論の視点から考察している。アナール派の歴史学者ロジェ・シャルティエや米国の歴史学者ロバート・ダーントンの、フランスのアンシャン・レジーム期における読書・出版を巡る史的考察をもとに、識字率の増大や小説の勃興、新しい読者層の出現、読書クラブや図書館等を通じた書物への接近システムの普及が確認された。そして、そうした時代背景の中でフェヌロシ、ランベール夫人、ルソー、ラクロがそれぞれの女子教育論において小説の読書のもつ意義をいかに位置づけているかが詳細に比較検討された。いずれの教育論においても、小説の読書は主要な論点として必ず取り上げられ、女子教育を語る際には避けて通れないものとなっていた。そして多くの場合、小説の読書が道徳的観点から女子教育論において否定的に取り扱われることになった経緯が詳述された。さらに当時の医学的言説においても、女性にとって小説の読書は性的な悪影響が懸念されるとして危険視されていたことを、ミシェル・フーコーなどの作品を援用しつつ明らかにした。この章で分析された4つの教育論は、いずれも今日にいたるまで、フランス本国においてさなおざりにされてきたものばかりであり、これらに注目し、18世紀が望んだ理想的女性像とその現実との乖離を明らかにした手際は注目にあたいする。ただ、その一方で、資料の引用の仕方、また論述方法や論の構成の仕方にややぎこちなさが見られたのもまた事実である。

第三章「小説の有害性と効用」では、ルソーの『新エロイズ』、ロベール・シャルルの『ドン・キホーテの続編』から二つの挿話「騙された嫉妬深い夫」と「慎重な夫」、ラクロの『危険な関係』、ラクロとリコボニ夫人の往復書簡を分析対象としつつ、「危険にして有害な」小説の存在意義を取り扱っている。まず文学史的観点から、17世紀フランスにおける反演劇論とそれに対する演劇論との論争が、18世紀になって小説の有害性と効用という形で引き継がれたと適切に指摘されたが、さらに小説の有害性には性差が付与されたばかりでなく、その効用も女性の美德にとっての効用ばかりが強調されたとの興味深い指摘もなされた。以上のような分析を通して、厳しい出版統制と検閲制度のもと、女性の美德にとって小説の読書は有害であるという当時の「常識」に対する作家たちの小説内あるいは小説外での戦略がシャルル、ルソー、ラクロなど先鋭的な作家たちの主たる関心事のひとつであったことを明らかにした。

第四章「小説における読書する女性たち」では、マリヴォーの『マリアヌの生涯』及び『成り上がり百姓』、プレヴォーの『マノン・レスコー』、ラクロの『危険な関係』、バルナルダン・ド・サン＝ピエールの『ポールとヴィルジニー』を取り上げ、女性の登場人物がおこなった読書がどのような結果をもたらすことになったのかを当時の一般的な社会規範との関係から考察している。小説および小説の登場人物は、第一、第二章で検討された小説外の現実的条件、イメージあるいは価値観に取り巻かれており、第三章で見た女性の美德を巡る教訓が付与されている。以上の点を踏まえて小説中での女性登場人物の読書と男性登場人物の読書との差異が検討された結果、女性登場人物の読書が男性登場人物の読書より教訓的に圧倒的に多く取り上げられている点、また、男性の場合、読書がその知的精神的優位性を表現しようのにたいし、女性の場合は、読書行為そのものが、小説の悪しき効用と密接に関連付けられているために、否定的に扱われる傾向が強いことが的確に指摘された。こうして、女性の美德にとって小説の読書は有害であるという「常識」が小説内でも踏襲される場合の多いことが明らかにされた。一方で、作家によってその手法はさまざまだが、人生を知り美德を守るために、逆に小説を効果的に使おうとする方向も存在していたことが述べられた。

論文全体を通して、小説の中で小説を手にする女性登場人物は、女性と小説を巡る18世紀という時代の言説の中に取り込まれつつ、作家たちによるエクリチュールの戦略の結び目として有効に機能しているとの興味深い結論が導き出された。本論文は、先行研究のきわめて少ない領域において、長年等閑視されていた資料を駆使して斬新な論を展開したという点においておおいに注目される。ただ、たとえば同じく18世紀の作家マルキ・ド・サドやレチフ・ド・ラ・ブルトヌヌなどの作品分析が加われば倫理観の分析、さらにはエクリチュールと権力との相克の分析にさらに厚みと深みが増したであろうと思われる。今後の研究課題として是非、取り上げていただきたい。

論文内容の要旨

論文題目 18 世紀フランス小説における女性読者のイメージ ― 美德を巡る戦略

氏 名
宇野木 めぐみ

18 世紀において、読者の性別はそのイメージに大きな意味を付与するものであった。1990 年代以降小説登場人物としての「読者」研究が盛んとなったのは、文学理論、歴史学研究において「読者」がクローズアップされてきたこととむろん関連している。本論は、さまざまなレベルの「読者」に目配りしつつも、主として、小説内の登場人物でありかつ女性である「読者」が、どのようなイメージで描かれているのか、またなぜそのようなイメージのもとに描かれているかを探求することを目的としている。18 世紀は「女性の世紀」と言われる一方、法的制度的にも、慣習上も性差による不平等は否めない。当時の女性の知的活動の中で、突出した知識層でなくとも比較的接近可能な読書という活動が、想像力の産物である小説内部でどのように言説化されるのだろうか。

本稿においては、まず第一章で同時代の視覚芸術において女性と読書がどのようなイメージのもとに描かれているのかを検討し、次に、第二章で女性と読書を巡る社会状況と女子教育論を検討する。次に、第三章で小説において小説の有害性と有用性がいかに言説化されているのかを検討し、第四章で小説の登場人物である女性たちの読書を検討するという構成となっている。本稿は、18 世紀フランスにおける小説を読む女性のイメージを再現し、そのイメージと作家たちの試みの関連を論ずることを目指すこととなるだろう。

第一章「18 世紀フランス絵画における書物」では、絵画という視覚芸術における書物と読書行為の性差を検討した。男性を描いた絵画の場合、画面の書物は、知性や権力、あるいは孤独な思索を示す符号として機能していた。18 世紀以前の絵画において女性と書物が描かれる場合、多くは聖処女マリアの受胎告知の場面であった。18 世紀以降、女性と書物を描く絵画において、一部の貴族女性の肖像画や、母子間の教育の場面を除外すれば、書物は個人的な楽しみの符号となり、小説を暗示させるものが多い。そして、感情や官能を刺激されたさまを描いているものが少なくなかった。また、集団的な読書を描いたものでは、男性が読書の担い手となっていた。18 世紀フランス絵画における書物と読書行為の表象には明らかに性差が見られたのである。女性と小説は視覚的なイメージの中で結びつけられ、道徳的に非難されまた揶揄される対象となっていたと言えるだろう。

第二章「女子教育論と小説」では、第一章で検討した絵画におけるような女性と読書を巡る共通認識、もしくは共同幻想が現実的な裏付けを持つものであったのか、当時の女性と読書の基盤となる社会状況を検討し、さらにフェヌロン、ランベール夫人、ルソー、ラクロの女子教育論を考察した。女性の識字率は男性のおよそ半分とはいえ、18 世紀の識字率は上昇し、また高価な書物を購入困難な層も、集団的読書や読書クラブの普及によって書物への接近が可能となり、娯楽としての小説読書のすそ野は拡大した。したがって、女性が読者たりえる現実的基盤が 18 世紀において実現しつつあったことが、女性と

小説の読書の関連付けが行われた理由の一つと言える。また、ないがしろにされてきた女子教育も、文人たちの検討課題となった。その多くはフェヌロンやルソーの論に見られるような性別役割に基づく女子教育であり、哲学や科学は女子教育には不要とされ、ランペール夫人のように抗議の声をあげる論者もいたとはいえ、ときには女性の知的活動は「滑稽な」ものとして揶揄の対象ともなった。さらに、フェヌロン、ルソー、ランペール夫人に見られるように、女子教育論においては多くの場合、若い女性にとっては小説の読書は危険なものと思なされていた。女性が小説を読むことを道徳的観点から制限する言説が生み出され、小説が有害と見なされていたからこそ女性と小説が関連づけられる共同幻想が生まれたと言えよう。しかし一方でラクロのように小説の読書に有害性だけでなく有用性を見出す者もいた。

第二章でふれた小説の存在意義に関わる有用性と有害性を巡る言説が生まれた背景として、17世紀の反演劇論において宗教的文脈で展開された演劇の有害性が、18世紀に興隆してきた小説に引き継がれ、さらにその対象として女性に特化され、女性の美徳にとって小説の読書は有害であるという認識となったと考えられる。この認識は18世紀を通じて一般的な「常識」と見做され、医学・科学も含めた知的権威のある言説においても反復されていた。このような小説観は、逮捕投獄といった措置も含めた厳しい出版統制下にある作家にとっては、大きな抑圧効果を持っていたにちがいない。第三章「小説の有害性と効用」では、シャル、ルソー、ラクロの作品分析を通じて、作家たちが小説の有害性という「常識」を前提として、さまざまな「常識」対策を行ってきたことを明らかにした。彼らは、小説内部では「作者」あるいは「編集者」による序文や、語り手の言説によって、ラクロとリコボニ夫人との往復書簡に見られるように、ときには小説外部で作家として現実の読者とのやり取りをすることによって、巧みに小説あるいは語っている事柄の有用性すなわち教訓性を喧伝している。序文で読者層をあらかじめ限定したり、これは虚構ではなくて事実であるかのように仄めかしたり、女性の美徳にとって有用な教訓が含まれていることを前面に押し出したりといった「常識」対策が試みられている。小説の有害性という当時の「常識」に巧みに配慮しむしろ利用しつつ、作家たちは小説を書きつづけていたと考えられる。しかし女性の美徳が、もっぱら貞節を指示し、型にはまっているのに対し、美徳にとっての有用な「教訓」の内容とその読者への提示の仕方は、小説によってさまざまと言える。

第四章「小説における読書する女性たち」では、マリヴォーの『マリアヌの生涯』『成り上がり百姓』、プレヴォーの『マノン・レスコー』、ラクロの『危険な関係』、ベルナルダン・ド・サン＝ピエールの『ポールとヴィルジニー』を取り上げ、女性を中心に登場人物の読書を検討する。第一章から第二章で検討した、小説外の現実的条件、イメージあるいは価値観に取り巻かれ、第三章で見たような小説に付与された女性の美徳を巡る教訓を付与され、小説中で登場人物である女性たちはどのような読書を

行うのか。男性登場人物の行う読書とはどのような差異があるのかを明らかにする。読書は、一定程度の階層の女性の生活において日常的なものとして小説内では描かれている。しかし、「小説」の読書は別の話であり、『マリアヌの生涯』におけるように、若い娘が小説を読む場合は、隠れながらであったり、『ポールとヴィルジニー』におけるように小説を読んで頭がおかしくなると非難されたりもする。『成り上がり百姓』におけるように情事を予測させる場面では小説の読書がその場の雰囲気醸成する小道具ともなる。以上は、女性の美徳にとって小説の読書は有害であるという「常識」を小説内でも踏襲していることから生み出された叙述だと言える。しかし、登場人物が、小説から人生の機微を読み取り、自身の危機を回避し、あるいは小説の読書に救いを求めることもありえた。『危険な関係』におけるように、小説から学習効果を得ようとする場合もある。さらに、読書そのものから何かを学習するというだけでなく、読書行為は、『マノン・レスコー』のデグリュエに見られるように、ときには示威的行為でもある。このように、小説において小説の読書の効用は意識的に取り上げられている。書物、とりわけ小説は、小説内で繰り返し取り上げられる題材となっているのである。

小説内の小説読者は、圧倒的に女性が多い。「小説を読む女」が、小説の中でここまでクローズアップされる理由は、第二章に見るような現実のいわゆる反映だけでは片づけられない問題を含んでいる。男性よりも美徳＝貞節を求められる立場である女性の美徳にとって小説が有害であると考えられていたからこそ、小説内で女性の読書はことさらに取り上げられ、「美徳」と「墮落」を両極とする基準線に置かれていたのである。男性が読書を契機として墮落するとされた小説が検討してきた作品群に存在しない一方で、小説によって美徳を守ったり、あるいは、墮落したり、いずれにせよ、女性の読書はそうした道徳的基準線に結び付けられていた。『ポールとヴィルジニー』では女性主人公の美徳を巡って、本人の読書が未確認のまま、周囲の人々の言説の中で皮肉な形で典型的に表現されていると言える。

作家たちは小説と女性を巡る負の言説に対して単に消極的に弁解するに留まらなかった。小説内の、小説を手にする女性登場人物の姿は、女性と小説を巡る時代の言説への、作家たちによる、時には宣伝、ときには弁解、ときには戦略の結び目となっていたのではないだろうか。だからこそ、女性たちの読書は小説内でことさらにクローズアップされ、さまざまな意味を付与されていたのだと考えられる。